

# こどもの絵の心理学



ルドルフ・アーンハイム

坂元 昂 要約

前回には、まえおきとして、芸術心理学を研究するのに、知覚の面からすると、社会関係の面からすると、モチベーションの面からすると、三つの主な領域があることに触れました。

そして、これらの三領域すべてに関係しながら、芸術活動や芸術作品を分析することによって、芸術的創造過程のヒミツを解き明かし、人間の精神の法則性にせまるという基本的な立場を述べました。

また、最近とくにこどもの絵が世間の関心を集めるようになってきた理由を、美術、心理、発達、教育などの領域について分析してみました。今回は、いよいよ、こどもの絵の本質と発達の問題に入ることにしましょう。

## △Ⅱこどもの絵の本質▽

こどもはよく絵をかきます。しかし、彼は、外の世界をただ紙の上にクレヨンやクレパスで写しているわけではありません。

たとえば、こどもに、外の自然を模写させようとしても、できた絵は混んとしています。これは、こどもの見る世界自体が、こどもにとっては、おとなの見るような形の外界として存在しているのではなく、もっと混んとした存在となっていることを意味しているのです。そこで、こどもが絵をかこうとするときには、外界の混んが自然に反映してくるのです。

しかし、こどもの絵は、ただ単に自然を機械的に模写するものではありません。こどもは、絵を画くということを一つの手段として、この混同とした世界を理解しようと努力しているのです。

つまり、こどもにとつては、世界を理解することは、とてもむずかしいので、絵や、粘土作りなどをおして、複雑な世界を理解し自然について知ろうとします。こどもはこどもなりに、自然の対象のなから、非本質的なものを除いた、事物の間の本質的な関係を理解しようと試みます。世界はどんなものから成り立っているのか、事物のどんな関係から成り立っているかについて、一生懸命に探索します。

もうこうなると、こどもの絵は、世界についての一つの解釈であり、説明である、と言ってもよいくらいです。

彼は、複雑な事物をみても、簡単な形として、こどもなりに描きます。つまり、世界をそのように把握したのです。ですから、こどもの絵は、単なる描写ではなく、現実についての、発明であり、明瞭化であり、解釈なのです。絵を画くことによって、よりよく世界を理解していき、絵を画けば画くほど世界がはつきりとわかってくるのです。

この仕事は、発達の充分でないこどもたちにとっては、たいへん困難なことです。全力を使い、知力、感情、感覚、全人的な能力を一点に集中させたいへんな仕事なのです。ちょうど、おとなが、

数学の方程式や文学の解釈などにとり組むときにも比すべき困難事なのです。

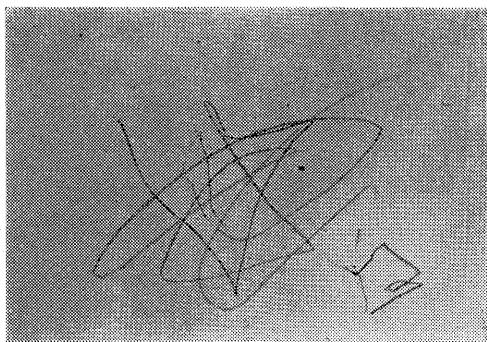
### Ⅲ こどもの絵の発達 V

世界に対するこどもの解釈は、はじめのうちは、単純です。したがって、はじめは、こどもは、すべてのものを、「円」とか、「水平」「垂直」の線で描きあらわそうとします。なぜならば、それが一番描き易いからです。やがて、こどもたちは、複雑な世界を、よりよく理解するようになるにつれて、だんだんと複雑な形を用いて絵を描くようになってきます。

#### こどもの絵は運動から

どんなに絵の上手な人でも、こどものころ描きはじめのときは、「なぐり描き」をすることしかできません。そこでは、ただ、手が運動しているにすぎないことになります。

絵を描いたり、色を塗ったり、形を造ったりすることは、人間の運動行為の一つには違いありませんが、そういつて片付けてしまふわけにはまいりません。それは、もっと一般的な行動、すなわち、相貌的運動と描写的運動の二つから発達したものだと思われていま



す。

相貌的運動は、もち

ろん、運動の一部です

が、それは、ある人の

パーソナリティの特性

や、あるときの特定の

経験の特性などをおの

ずと反映します。つま

り、その運動をみれ

ば、その人が強いか弱

いか、自信をもってい

るか、はずかしがりや

か、などがわかること

か、おもしろいとか、つま

らないとか、幸せか、そうでないか、などもわかるようになるので

す。

描写的運動は、知覚したものを表現しようとするときの動作で

す。手や足を使って、あるものが、どんなに大きいか、あるいは、

小さいか、速いか遅いか、丸いか角ばってるか、遠いか近いか、な

どをあらわします。この運動は、いわば、手ぶり、身ぶりであっ

て、具体的な対象とか、事象とかに関係して、それを示しているの

です。ここになると、もう、砂に絵を描くのとそんなに違わなくな  
ってきます。

みぶりのときには、ものの形はりんかくであらわされがちです。

それは、りんかくで描くのが、もつとも心理的に簡単で、手のテク

ニックとしても、もつとも自然だからなのです。

面を色で塗りつぶしたり、ものの形を作ったり、彫ったりするこ

とは、それと比べると、ある形を目的として、それを構成する運動

を含んできます。

こどもたちも、実際に描き初めるころは、もつばら、線を利用し

ます。その意味では、一次元のストロークを用います。

最初に「なぐりがき」をするときは、描きあらわそうという意図

があるわけではありません。むしろ、以前にはなかった何かが見え

たとき、それについて、何かの心を動かす経験をしたとき、その感

動を表出しようとするのです。これは、感動したときに、身体で表

現することと、そう違いはありません。すなわち絵を描くのは、見

たものへの興味からおこるのです。この見たものへの興味こそが、

あらゆる芸術に生命を与えるのです。

かくして、絵がはじまります。ストロークの形、範囲、位置は、

腕や手の機械的なつくりや、描く人の気質、気分によって左右されます。

だが、すぐに、目に見える効果、つまり、今描いた線に注意をひ

かれるようになります。そして、また描き加えることになるので、

線が線に加わって、面<sup>ア</sup>になってきます。ここに二次元の世界が生まれるのです。

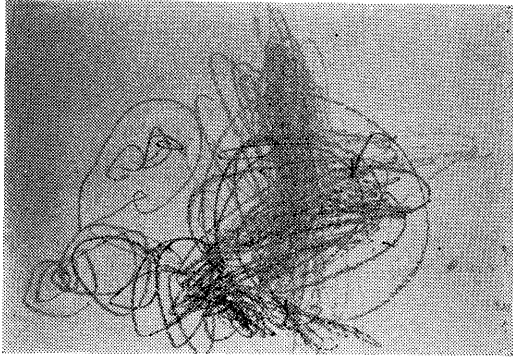
第1図をごらん下さい。3才児が描いたものですが、このことをよくあらわしています。

### 円の時代

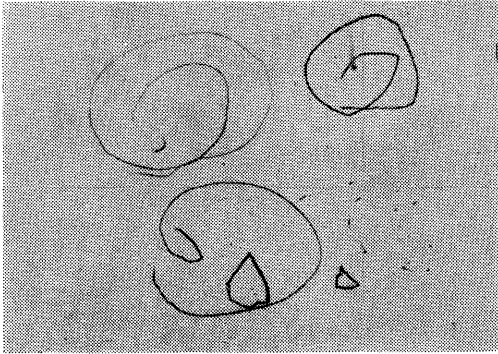
やがて、次第に、ジグザグストロークのマスの中から、丸い形

があらわれてきます。はじめのうちは、回転の形です。描く腕の運動に対応しているのです。それが、だんだんと、運動の訓練を積むと、カーブがスムーズに、そして、単純になってきます。

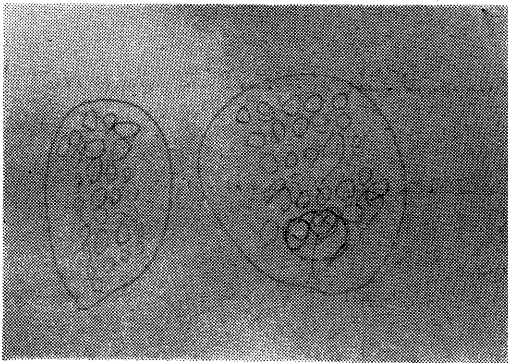
視覚的にもこれが同じことが言えます。円には、方向性がないので、もっとも単純な形です。したがって、こどもの絵には、円が多くあらわれてくることになるのです。そして、視覚的な統制がきくようになるにつれて、廻転運動は、だんだん、われわれにも理解で



第2図 三才



第3図 三才

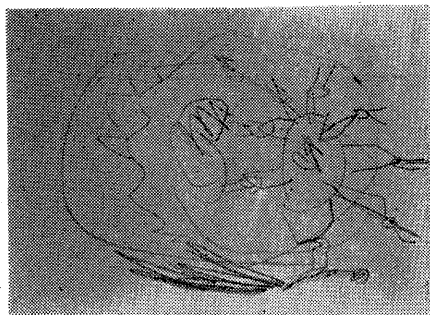


第4図 三才

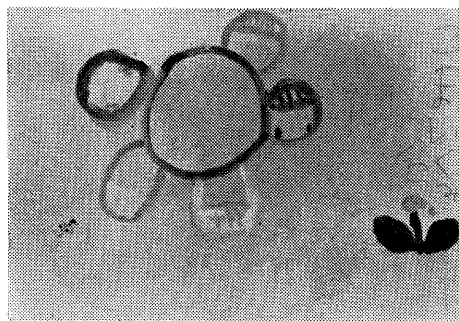
きるようになりんかくになってきます。

つまり、運動のなから、視覚的なものが分化しはじめるといってもよいでしょう。これが、本当の絵のはじまりです。第2図は、その様子を示しています。第3図は、何か三つものものを示していません。

線というものは、不思議な性質をもっています。それは、一本のときは、単なる線ですけれども、一旦閉じてしまうと、りんかくとなり、その中は、何か密度の濃いものになるからです。そこで、こ

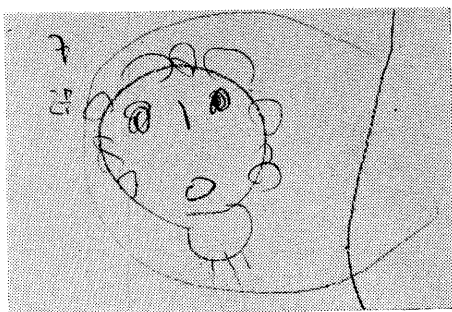


第5図 三才

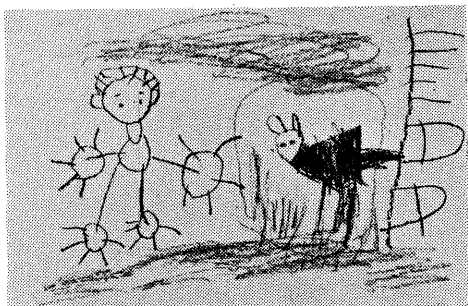


第6図 四才

第7図 三才



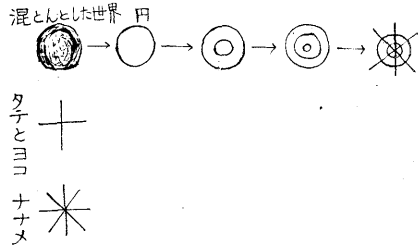
第8図 四才



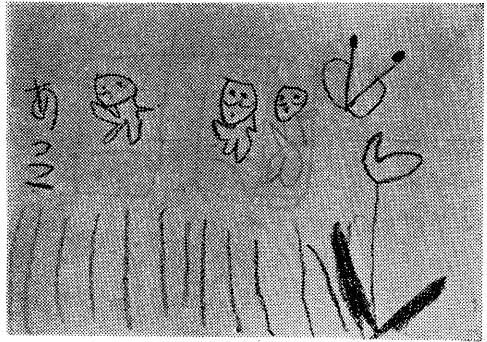
どもは、ものをあらわすのに、どんどんと、りんかくのうちでも一番描き易く、把握し易い円を、多く利用することになるのです。第4図をみて下さい。卵がたくさんあります。元来、丸くて見やすい上に、描き易いので、たくさん円ができました。

しかし、実際は、こどもでは、円が必ずしも、丸いもののみをあらわすのではなく、あらゆるものをあらわしているのです。これは、ちょうどおとなでも、わからない原子などの形が円であらわされるのに同じ具合なのです。つまり、何だかわからないが、何かも

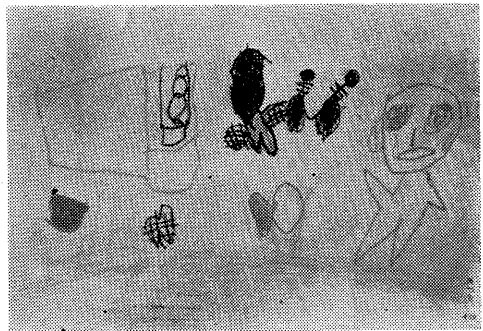
第 9 図  
 こどもの世界の把握の特徴の発達



第10図 四才



第11図 四才

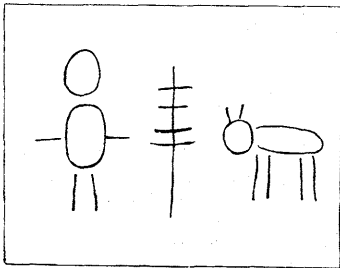


のがあることを理解し、それを描きあらわすときに、こどもは円を使うのです。

世界に対するこどもの理解が、だんだんと複雑になるにつれて、こどもの描く絵にも、二重の円ができたり、円の組み合わせができてきたりします。第5図、えんとつの爆発、第6図、イスとテーブル、第7図、女の子、第8図、馬とわたし、などがその例です。爆発のときの火の粉、イス、髪の毛、手、胴体、耳なども、円であらわされています。つまり、一度、あるものが、円という形であらわされるようになると、何か他のものを描きあらわすときも、その形が

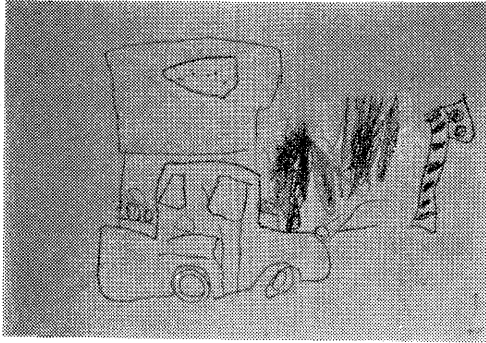
使われることになるのです。

このように、あらわるものうちで、一番描き易い形としてとられた円は、こどもが、世界をよりよく理解できるようになるにつれて、第9図のように、だんだんと複雑になり、他の関係まで入ってくるようになります。第10図は、線で囲んだりん

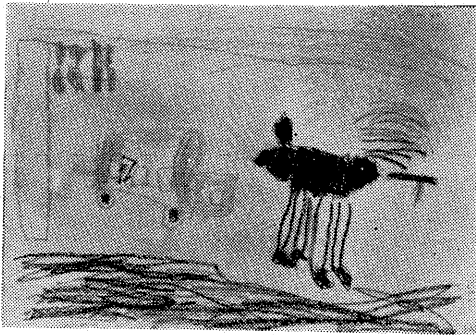


第 12 図

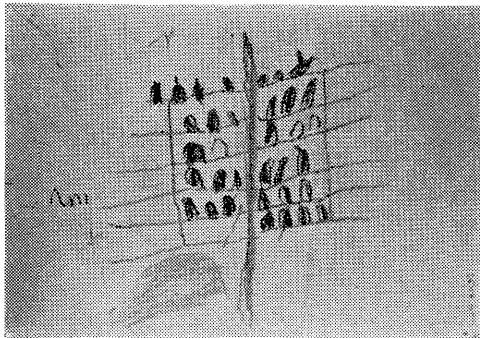
第14図 四才



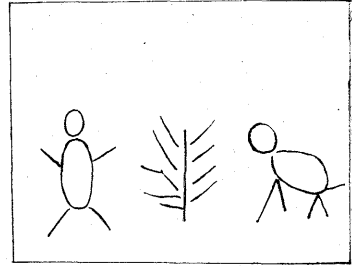
第15図 四才



第16図 四才



第13図

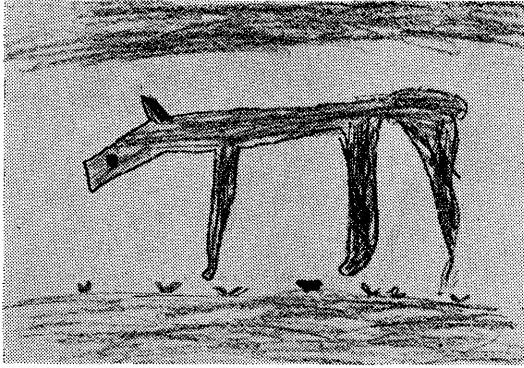


かくが、ものをよくあらわすことを示しています。ちよう、花、人間など、りんかくの効果によって、ものが理解されています。第11図は、もう少し詳しく、りんかく線の効果がみられています。人の目や口や耳は丸く、身体もちゃんど、りんかくになって、その実質を示してくれているのです。

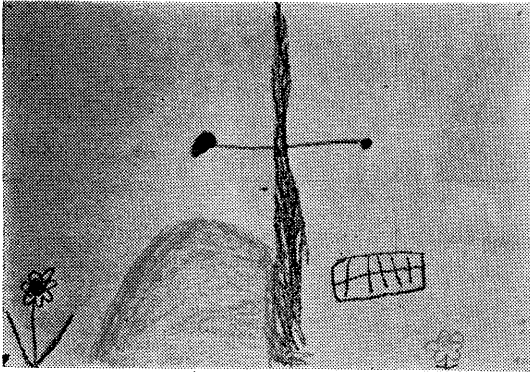
### 水平と垂直の関係

あらゆるもののなかで、一番簡単な形は、円でしたが、こどもは、世界を理解するのに、ものの関係も利用します。すなわち、自然の対象を理解するもつとも簡単な仕方は、それをタテとヨコの関係で捉えることなのです。それがだんだんと発達すると、ナナメの関係でも、外界の把握ができるようになってきます。たとえば、はじめは、第12図のように、人間や木や動物をタテとヨコの関係で描いていたのが、第13図のようにナナメの関係でも描けるように進んでいくのです。

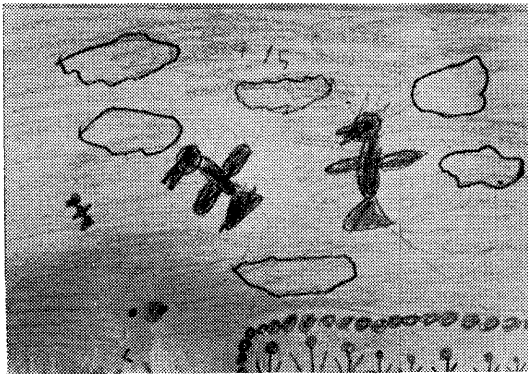
第17図 四才



第18図 四才



第19図 五才

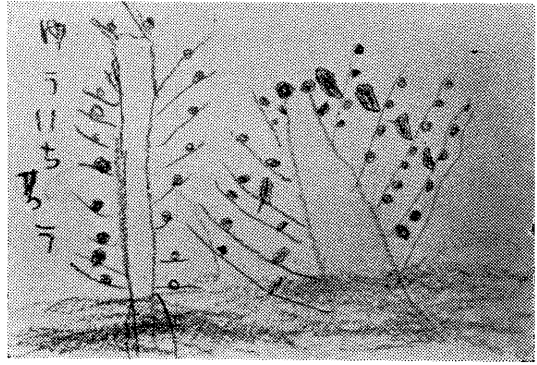


第14図は、自動車が見事なタテとヨコの線で描かれています。シグナルも、木も、タテに強調されています。第15図では、左の木が、タテとヨコの関係で捉えられています。板は、真横にのびているように描かれています。もちろん、自動車は、タテとヨコの関係で把握されていますが、馬も、足と胴、頭が、それぞれタテとヨコの関係で捉えられています。第16図、第17図も実に見事なものです。

ななめの線

こどもの知能や観察力が発達してきますと、このタテとヨコの関係は、もっと複雑になります。ナナメの線が加わってくるのです。こどもたちは、それによって、動くものと、静止したものの区別を、絵の上でもできるようにってきます。ナナメの関係が入ってくることによって、絵に新しい生命と生活が吹きこまれるのです。第18図、第19図では、タテとヨコの関係の他に、ナナメの関係が捉えられています。第20図は、第15図、16図と比較してみると実に見事な対称を示しています。木は、動いて、生きているように見え





ます。

博士は、こ

で、子どもの絵の本質を、外界の模写なのではなく、

子どもなりの、外

界の理解、あるいは

解釈であり、そ

れは、一つの発見

でもあると述べて

いられます。知覚

心理学者は、え

て、人間を外界の機械的な反映として、レンズとか機械のように考

えがちです。しかし、アーンハイム博士は、人間に主体性、能動性

を与えておられます。芸術心理学者として当然の立場といえるでし

よう。

また、子どもの絵の発達については、絵の起源は、相貌的、ある

いは、描写的運動であり、それが紙の上に跡をのこすようになり、

さらに、その跡が子どもを視覚的にひきつけることによって、さら

にストロークが加わることになると考えられます。

絵の発達は、子どもの外界を理解する精神の発達と平行していま

す。はじめ、子どもは世界を混とんとしたものだ把握します。そ

れから、「円」というもつとも単純な形で把握するようになりま

す。あるいは、タテとヨコという、もつとも単純な「関係」で把握

するようになります。そのうち、精神の発達につれて、だんだんと

複雑な形やナナメ関係の関係などで世界を解釈するようになるので

す。

なお、博士は、一度このようにして使われるようになった「円」

という形や「タテとヨコの関係」などは、その後、世界を把握する

ときには、どんどん適用され、そして、子どもはこれらのものをそ

の形や関係で理解しようとするようになると、指摘しておられま

す。これは、精神発達がさらに進んだときには、不合理を生じ、そ

の解決が求められ、そして、次の形や関係が生まれてくるのです。

いわば、子どもは、絵を描くときでも、シエマで外界を解決し、そ

して、そのシエマでは外界を解決しきれなくなると、次のシエマを

工夫していくことになるわけです。

\*

\*

\*

\*